

---

# ブラザークエスト

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラザークエスト

### 【Nコード】

N2934M

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

生き別れた兄を探す弟の物語。

なぜ兄は消息を絶ったのか？

今どこで何をしているのか？

わずかな情報を元に、北条アキラはゆく…。

作：青木弘樹

北条アキラ：23歳

北条ナオト：30歳

佐野まゆみ：37歳

市川ケンジ：???

俺は…兄を探している。

俺の名前は北条アキラ。23歳。俺には7歳年上の兄がいた。俺が3歳のころ、兄は突然いなくなつた。理由は分からない。それから5年後、父は酒の飲みすぎで死んだ。そして…今から三年前、母も死んだ。夜中に路上で何者かに刺されたんだ。母は昔、夜の仕事をし、俺を養ってくれていた。何度かトラブルもあったようだが、結局犯人はいまだに見つかっていない。

そして…俺は今、兄を探している。覚えているのは名前だけ。3歳のころの記憶など、ほとんどない。どんな顔だったのか、どんな声だったのか、どんな将来を夢見ていたのか、何も分からない。分かっているのはただひとつ。名前が北条ナオトということだけ。

わずかな親の遺産、働いて貯金した金、それらを持って俺は今、ある場所に向かっている。ある児童養護施設だ。噂だけが、15年ほど前まで、北条ナオトという名前の少年が、かつてその施設にいたらしい。

たまたま名前が一緒なだけかもしれない。しかし俺は向かった。兄を探して…。

ちなみに俺は現在は無職だ。兄を探すために俺は仕事をやめた。なぜそこまでして兄を探すのか？ たった一人の肉親だからか？ まあ

それもある。しかしそれ以外にも明確な理由がある。

その理由とは…ま、それはそのうち分かるだろう。とにかく俺は電車に揺られ、その児童養護施設を目指していた。

「北条ナオト…兄さん…」

俺は古ぼけた写真を一枚持っていた。そこには兄が写っていた。ただ横顔なので、はつきりは分からない。しかし手がかりはあった。首筋にほくろが二つあるのだ。兄らしき男を見かけたら、首筋を調べる必要がある。俺の首筋にはほくろはない。しかし目の下にほくろがある。あるいはこれを見れば、兄も俺を思い出すかもしれない。いや、もう忘れてるかもしれないがな。

それにしてもずっと疑問なのは、なぜ20年前、兄は突然行方不明になったかだ。

それに…もうよく覚えていないが、父も母も、そんなに動揺していなかったように思える。まあ、うちは決して裕福ではなかったから、日々の生活に追われていたのかもな。

「北条ナオト…」

俺は再び写真を見た。どことなく母の面影がある。俺はどちらかというと父に似ている。もっとも酒で死ぬような人生はまっぴらだ

が。  
酒の飲みすぎで死んだと言ったが、正確には酔っ払って転げ落ちたんだ。ある日の夜中、河川敷で。

俺は父が好きじゃなかった。酒が好きで、暴れはしなかったが、帰りが遅くなることもしばしばだった。だから俺は酒は嫌いだ。

母のことは好きだった。冷たい側面もあつたが、誕生日にはケーキを作ってくれた。唯一嫌だったところは煙草を吸っていた所だった。水商売を始めるまでは吸っていなかったが、周りの影響で吸い始めるようになった。仕方ないといえば仕方ないことだが。

俺は煙草も吸わない。しかし考えてみれば、酒と煙草は人間の二大娯楽要素。俺は人生を損しているんだろうな。

酒、煙草、ギャンブル、女…男は何も考えず、気ままに遊んでい

るほうが人生楽しいに決まってる。なぜ俺は生き別れた兄を探してわざわざ電車に乗っているんだ？

それも感動のご対面のためじゃない。情報もあいまい。

「やめよう…」

俺は考えるのをやめた。ミュージシャンや小説家が時々自殺するのは、きっと考えすぎなんだ。頭がいいということは時に不幸なことでもある。まあとにかく、少し眠ろう。

電車に揺られること2時間。目的地の児童養護施設に最も近い駅に着いた。こちら辺は田舎で、景色もいい。残念なのは今日が曇り空だということだ。まるで俺の心を察しているようだ。しかし俺はそんな神秘的なものは信じない。幽霊も信じないし、占いも信じない。よって占いのババアも信じない。

「さて…」

ここからは歩きだ。地図を見る限り、30分も歩けば着くだろう。自動販売機で缶コーヒーを買い、ゆっくりと歩き出した。

歩きながら考えていた。俺はこの先どうなるだろう？兄と再会できたとして、その先は…？しかしもう後戻りも出来ない。俺は一步一步確実に歩を進めた。

そして約30分後、俺は目的の児童養護施設に着いた。古そうだが、なかなかいい施設だ。

「すいません」

「はい？」

玄関に人がいたので話しかけてみた。

「あの…この責任者の方はおられますか？」

「いますが…どういったご用件でしょうか？」

俺は事情を話した。

「そうですか…分かりました。では館長を呼んできますね」

「すいません」

しばらくして館長が現れた。男性で、歳は60くらいか。

「はじめまして。私は北条アキラといいます」

「はじめまして。館長の竹中健二です」

俺は館長に事情を話した。

「なるほど…生き別れたお兄さんを探して…」

「はい」

「では、とりあえず記録を見てみましょう。こちらへどうぞ」

俺は資料室に案内された。

「まあ座ってください」

「はい。失礼します」

俺は椅子に座った。館長は資料を探し始めた。

「失礼します」

職員らしき女性が入ってきた。

「お茶でもどうぞ」

女性はお茶を机に置いた。

「すみません。わざわざ…」

「いえいえ。遠くから大変でしたね」

「ええ…まあ…」

「ゆっくりしてってくださいね」

女性は笑顔だった。俺は少し気が安らいだ。

「ありがとうございます」

女性は去っていった。

「うむ…このあたりだな…」

館長はそれらしい資料を見つけたようだった。

「ちよつと見てみようか」

館長は優しそうな人だった。俺のような客を自ら相手するとは親切だ。あるいは暇なだけかもしれないが。おっと…そういう邪推はやめよう。

「北条ナオト…北条ナオト…」

館長は資料をくまなく見ていた。そして

「あつた！」

館長は見つけたようだった。俺も見てみた。

「ここの施設に20年前に預けられている。施設を出たのは15年前。しかし写真はなかった。」

「あの…元はどこに住んでいたかは分からないんですか？あと写真とか？」

「ん？ああ、そういう個人情報には別にファイリングしてあるが、悪いがそれは外部の者に見せることは出来ないんだよ」

「そうですか…」

「悪いね。規則でね」

「…」

「これだけの情報ではどうしようもない。」

「よかつたら連絡先教えてもらえんか？携帯電話の番号でもいい。何か分かつたら連絡させてもらおうよ」

「本当ですか？」

「俺は携帯電話の番号ほか、住所や生年月日なども教えた。」

「よし。じゃあ詳しいことが分かつたら、電話するよ」

「よろしく願います」

「昔からいる職員にもいろいろ聞いてみるよ」

「ありがとうございます」

「俺は深々と挨拶をし、そしてその施設を去った。」

「夜。俺はとりあえず簡易ホテルに一週間ほど泊まることにした。」

「外泊なんて、何年ぶりかな…」

「俺はちよつとした旅行気分だった。しかし遊びほうけるわけにはいかない。といつてもここは田舎だ。娯楽施設もほとんどなかった。」

「3日が過ぎた。連絡はまだない。」

「遅いな…本当に調べてくれているのかな？」

「時間的な問題もあるが、とにかくお金がもつたいたいと思った。」

「しかしその2日後。」

”ピピピピピ…”

携帯電話が鳴った。

「もしもし！」

「もしもし？アキラ君かね？私だ。館長の竹中だ」

「はい。北条アキラです」

「待たせてしまったな。彼について分かったよ」

「本当ですか？」

「アキラ君、残念だが、おそらく彼は君のお兄さんではないよ」

「！？」

「まず昔の住所がまったく違うんだ。そして彼は今、ある工場で働いているんだが、うちの職員が本人に直接会っているという聞いてみたんだ。そしたら彼には兄弟はいないとのことだった」

「……」

「首筋にほくろもないし、今は結婚して幸せに暮らしているようだ」

「そうですか……」

俺はがっかりした。しかしちゃんと調べてくれたことには感謝した。

「残念だが、そういうことだよ」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

「すまないね、力になれなくて」

「いえ……」

「それじゃあね、アキラ君。気を落とさずにね」

「はい。ありがとうございます」

俺は電話を切った。

「……」

出来れば自分が直接本人に会って確かめたかったが、施設の人が嘘を言っているとも思えない。やはり人違いなのだろう。

夜だったので、今日はとりあえず寝て、明日家に帰ることにした。

次の日。

俺はまた電車で揺られていた。俺は窓から景色を眺めていた。今日はいい天気だ。そして俺の心も晴れやかだった。

ここ数年は働いて寝る、の繰り返しだった。たまに映画を見に行ったり、友人と食事に行ったりもしたが、基本は働いて寝る、それだけだったので、このちょっととした旅行が楽しかったのだ。

海外旅行にしょっちゅう行く人の気持ちだが、少し分かった気がした。

それに田舎はいい。俺の住んでいる町も大都会ってほどじゃないが、まあまあ都会。都会には都会のよさもあるが、おしゃれなビルより、きれいな山や川のほうがいい。それは人の本能がそう思わせるのか、俺が都会でいい思いをしたことがないから、そう感じるだけなのか。

とにかく歳をとったら田舎に住みたい。今はそう思った。

そしてその日の昼過ぎ、家に帰ってきた。

とりあえず途中で買った弁当を食って腹ごしらえをした。腹が減っては戦ができぬ、ってやつだ。

その後、俺はパソコンを開いた。

見るのは、人探しのサイト。出来るだけ金は使いたくないので、探偵には依頼しない。いや、むかし依頼したことはある。しかし結局見つからなかった。

今の世の中、金をかけないで何かをしようと思ったら、時間がかかる。しかし金をかけたからといってうまくいくとも限らない。だったら時間と手間をかけたほうがいい。どうせ無職だ。時間はたっぷりあるぞ。

数日が過ぎた。

俺は今日もパソコンを見ていた。時々、転職のサイトも見ていた。今は貯金があるから何とかなるが、永遠に無職というわけにもいかない。

そんな中、ある情報が目に入った。

「ん？」

そこに書かれていたのは、こういう内容だった。

北条ナオトという30歳の男がタクシーの運転手をしているというのだ。しかも俺の住んでいる町のとりの町で。その男は両親もいなく、かなり若いころから一人で生きてきたらしい。

「これは…」

ネットの情報というのは、嘘も多い。間違いも多い。しかし他に頼るものもないし、とりあえず行くしかない。

「よし！」

次の日。俺はさっそくそのタクシー会社に向かった。

「ごめんください」

事務所のような所へ入ってみた。人がいなかった。外部の者がこつも簡単に入れるとは驚きだ。まあ見たところかなり小さな会社みたいだし、監視カメラはある。盗む価値のあるものもないようだし、車を盗んだところで、タクシー車は目立つからすぐ分かる。きつとそういうことだろう。

「ごめんください」

しかし返事はなかった。しかし数分後、

「あの…何か？」

事務員のおばさんらしき人が入ってきた。

「あ、すみません、勝手に入って。実は人を探しています、北条ナオトって人なんですけど…」

「北条さん？ええ、今日も出勤してますけど…」

「そうですね。ちょうどよかったです」

「ええ。どういっご用件ですか？ま、だいたい分かりますけど…」

「？」

おばさんは妙なことを言った。

その時、あるタクシー車が帰ってきたようだった。  
「ああ…あの車ですよ、。間違いはないわ。けどあなた、乱暴はしないでくださいよ」

「乱暴？」

「このおばさんは、いったい何を言っているのだろうか？」

「では失礼します」

俺は事務所を出た。さっきのおばさんが言っていた車は駐車場に停まり、中から男性が出てきた。

「あの、すみません」

俺は男に近づいた。

「！」

男は俺を見るなり、驚いた表情をした。そして、

「わああ！ごめんなさい！」

そういつて、慌てて走って逃げた。

「！？」

俺はわけがわからなかった。しかし一瞬、首筋にほくろのようなものが見えた。

「ちょ、ちよつと待ってください！」

俺は男を追いかけた。

事務所のおばさんが、その様子を見ていた。

「やれやれ…北条さんにも困ったものね…」

「おーい！待ってくださいー！」

俺は必死に追いかけた。それにしてもなぜ逃げるんだ？

「はあはあ…うわっ！」

男はつまずき、転んだ。俺は男に追いついた。

「はあはあ…ちよつと…どうして逃げるんですか？」

「頼むよ！あと二週間待ってください！そしたら給料が入るから！」

男はおびえていた。

「はあ！？あんた何を言ってるんだ？」

「だから今は金はないんだよ！頼むよ！？」

「あんた何か勘違いしてないか？」

「ええ？だつて…あんたサラ金の追い込みだろ？」

「サラ金？」

「あんたん所の社長から電話があつたんだ。最近イキのいい若いの

が入ったから、覚悟しとけって…」

「…」

「ち、違うのか？」

「違うよ…まったく…」

「じゃ、じゃあ、あんたはいつたい…」

俺は汗をぬぐい、事情を話した。

「へえ…そうか。そうだったのか…」

男はようやく落ち着いた。

「それで、ここに来たんです」

「なるほど。けど残念ながら俺はあんたの兄貴じゃないよ」

そう言つと男は首筋を見せた。

「！」

首筋にほくろは一つしかなかった。

「なっ。しかも俺は今妹と暮らしている。弟なんていないし」

「そうですか…」

「ったく、あいつ半年前、急に来て、しばらくここでいさせてだっ

てよ。離婚したみたいでさ…」

「…」

「サラ金には追われるわ、パソコンは壊れるわ、踏んだり蹴ったり

だよ…」

「…」

俺は少し同情した。

しかしその時。

「サラ金だけじゃないわよ」

ある女性が現れた。腕を組んで、男をにらんでいた。

「あ…まゆみ…」

「気安く呼ばないでナオト。いい加減ツケを払ってもらっからね」

「？」

この女性はいつたい…。

U  
U  
<U  
U

(後書き)

その1～その4まであります。  
よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2934m/>

---

ブラザークエスト

2010年10月8日14時30分発行